

## 日本語の再発見

## 人は言葉で物を見てゐる

ところで、人は物を観察する場合にも「言葉(内言)を使って物を観てゐる」ことが、今では実証されてゐる。例へば、次のやうな実験がある。

ここにいろいろな色や模様のある蝶の標本を納めた箱があつて、その中に、「地が黄色い色をした羽に、縞模様のある蝶」が一匹あつたとしよう。その蝶を一匹だけ取り出し、これを数人の幼児たちによく観察させる。

さて、それから数時間経つた後、この蝶を元の標本箱の中に戻し、幼児を一人づつ呼び出して、「さっき見た蝶はどれだつたかな、当ててごらん」と言つて当てさせるといふ実験である。

この実験で、「正しく言ひ当てることの出来る幼児は、必ず“黄色”といふ言葉も、“縞”といふ言葉も、どちらも知つてゐる幼児に限られる」といふことが判つたのである。この言葉のどちらかでも知らない幼児には、決して正しく言ひ当てることが出来ないのである。

それは何故だらうか。“黄色”といふ言葉を知らない幼児には、黄色い色は目に入りはするのだが、それを意識し、記憶するまでには至らないからである。

つまり、“黄色”といふ言葉を知つてゐて初めて「この蝶は黄色いな」

と思ふことが出来るのであつて、この言葉を知らない幼児には、「この蝶は黄色い」と思ふことが出来ないし、従つて、「黄色い蝶だつた」といふ記憶が出来る訳がないのである。

だから、“記憶”や“知識”を頭の中に貯へるためには、先づ何よりも“言葉”が必要なのである。同じ経験をして、豊かな言葉を有つた者は豊かな記憶が出来、豊かな知識を貯へることが出来るが、言葉が貧弱だと、記憶も知識も貧弱にならざるを得ないのである。